

つくしんぼ

No.500
2025年
11月4日
(火)

11月号
(霜月)
文責：瀧口

学習発表会シーズンです。ことばの教室に通ってきている児童にとって、ちょっと気が重い行事です。なかでも、吃音症のある児童の心には、せりふのタイミングがずれ、劇の流れをこわしてしまわないだろうかという心配があります。担任の先生方には、彼らの思いをくみ取り、対応していただきたいと思います。下に当事者の「思い」を再掲しています。学習発表会だけでなく、学校生活のいろいろな場面で、彼らが(その家族が)どう感じているのか、お読みくださればと思います。

「去年、練習ではうまくいったのに本番でことばが出なかった…」と話してくれたA君。「でも、楽しいから今年もがんばるし、どのせりふも(出なかったら)同じだから。」こう続けたA君はすごいなあと言うしかありません。「ぼくには吃音があるけど、そのままのぼくでいい。」と思える子に育ちつつあるA君。彼をまるごと受け止めてくれている周囲のみなさんに感謝します。

の「出*
子より最後
のうッまで
吃なッそ
音アクで
」ドス評
にバ」価
ツイし子
いしたの
てはら話
しなない
し話で聞
いせいく
かでるだ
りくわさ
話だけだ
をささい
しは*
てく*
だ*
さい*
。吃
。音
。出
。た
。そ

教育者のみなさまへ

今でも吃音で困ることのない日はなく、症状がなくなることはない。しかし「周りがどう思うかではなく、自分がどう思うか」を考え、行動を変えていくことで、生きやすくなることもあると思っています。

かけ算を何度も言われた。分からないのではなく、ことばが出ずストレスだった。

教育者の方であまり吃音について理解されていない方に限って「大丈夫ですよ。」「治りますよ。」などと言われる。親として、この方、吃音のことご存じないなあと思っています。

話しづらそうだから、代わりに言ってあげようっていうふうな「話の最中の支援」はいらない。待つっていうのは、その人を認めることにつながっていると思っています。

ことばをくりかえしてっていうのは分かるんですけど、なんか止められない感じで。吃音が出ることには、正直、面倒くさいなと思っています。

授業で当てられ、すぐに答えられなかった時、先生がため息をつき、次の人を当てたのが嫌だった。

笑う人たちは、本当に子ども。周りの理解してくれる友達を大切にしたいと思う。周りと比べずに自分らしくやっていたら大丈夫。

周りに知ってほしいのは、「普通」を押しつけないこと。話し終わるまで待つほしいこと、吃音を持っていても他の人と変わらず接してほしいということ。

大学の教授から「家で音読練習をしろ」と言われた。練習したって言えなくてつらくなるだけだから、練習しろと言わないでほしかった。

小学校の先生に「落ち着いて」と言われた。その接し方まちがってるよ。

緊張が直接の原因ではないことを知ってほしいです。緊張しなければ、症状が出ないと誤解されているような気がします。リラックスしていても吃音が出るということが、非吃音者の方には意外に感じるのかもしれないですが。

ぼくも子どもの時に笑われた経験があって。心のダメージは計り知れないものがあった。大人になったから言えますが、娘には吃音とうまくつきあってくれたらと思います。

参考：『菊池先生の吃音ライブ』『Yahoo!ニュース：国際吃音啓発の日：注文に時間がかかるカフェ』『バリバラ：きつ音のある子どもたち』



『ことばがすらすらでないんだ』

吃音について学んだことがある人は、吃音のある人に「最後まで聞くよ」「話し方より内容を聞いているよ」とメッセージを送っています。吃音に対する誤解がたくさんあることを教えてくれる一冊です。



『ぼくは川のように話す』

吃音に、たんなる吃音というものはなく、それはことばと音と体がからみ合った、とても個人的な苦悩の塊です。なめらかな話し方であればいいのに、と思います。でも、そうになったら、それは、ぼくではありません。



『るいちちゃんのけっこんしき』

大事な友達との結婚式に、自分のことは「おめでとう」を伝えたい。一生懸命練習したのに、スピーチでどもってしまった。あや、涙を流すあやにるいちちゃんがかけたことばとは、作者の奥さんの体験からできた、絵本です。



『まーるごとでよろしく』

友だちや担任の先生、ことばの教室の先生、家族の支えで、つまってしまうことも全部含めて、「まーるごとで私なんだ」と思えるようになった、りんちゃん。そして、自分が大切だと思えるようになりました。インクルーシブ教育はまるごと受け止めることから始まります。



『ジャガーとのかくそく』

「じぶんの声を見つけられたら、ぼくがかわりに君たちの声を伝えるよ。」動物園のジャガーと約束した少年は、吃音を克服し動物学者になる。世界で初めてジャガーの保護区を作ったラビン・ヴィッツさんのノンフィクション絵本です。



『きつおん』

社会福祉士となった著者が、吃音で苦しむ人に向け、自身が吃音で悩んだ経験を漫画化。吃音を「障害」にしてしまうのは、環境の影響が本当に大きい」と著者は言います。悩んでしまう原因は、あなたのせいではなく、教養のない周囲の人たちの心ない言動なのです。

「吃音」の本

- * 貸し出せます。
- * 新見図書館にもあります。



『吃音(きつおん)』を知っていますか?

—どうしても、うまくしゃべれない—
それは、吃音かもしれません。

ひとりで悩む子どもたちへ、「ひとりじゃないよ」と伝えたい。

↑ YouTubeで見ることができます。